綿内弥栄社御祭礼

弥栄社御祭礼は江戸時代から200年余の伝統がある祭典で、須坂藩の南部穀倉地帯であった綿内の五穀豊穣、郷村繁昌を願う祭りとして続いてきたと言われます。

祭神は素佐之男命（牛頭天王）で、毎年８月１日の朝、神事により神の降臨を得た神輿が小内神社を発ち、各地区を巡回して町区の仮宮に遷座する「天王おろし」があり、７日の夜は提灯行列を伴い本殿に奉送され、神楽の「シャギリ」の音の中を天に帰るとされています。

行列の人足の順序や役割、神楽や神輿の当番など、慣例や規約により格式と伝統が厳しく守られています。

また、期中には大祭などが行われ、町内は夏祭りの趣となり大いに賑わいます。

赤野田神社太々神楽

赤野田神社に伝わる太々神楽は、長野市周辺のお祭り神楽の原点と言われ、伊勢の代神楽獅子舞の系統となる古くからの踊りを継承しています。

若穂地区には、伊勢神宮外宮の長田御厨があり、伊勢代神楽を全国に広めた伊勢神人芸能団とも密接な関係を持っていたと考えられます。

獅子神楽の囃子唄の中に「岡崎ぐろしゅう、木曽のかけ橋、太田の渡し」などの知名が出てくるのは、伊勢から尾張、三河、南信濃を経てこの地に至る道中の順路を示していると言われています。

（長野市指定無形民俗文化財）

高井穂神社赤熊（しゃあま）

赤熊（しゃあま）は、奴（やっこ）または奴巻（やっこまき）とも言われ、江戸時代中期から高井穂神社に伝わる伝承行事で、七年に一度の御柱祭の年や遷宮等の大祭の時に奉納されています。

総勢60余名、役者40余名で道中行列を行い、赤熊は長い竹竿の先に赤く染めた大麻を付け、二人一組で空中に投げて相手に送るなど、力強く躍動感のある所作に特徴があります。

由来は、水利権争いで江戸に上った保科の名主が江戸赤坂の奴踊りを持ち帰った、あるいは諏訪神社御柱祭の騎馬行列と赤坂奴が一緒になったなどと言われています。近郷に例無く、この地区だけに伝承されている貴重な行事です。（長野市指定無形民俗文化財）

長原古墳群7号古墳

若穂団地公民館わきにある７号古墳は、保科川によって形成された扇状地の扇央部に立地する長原古墳群のひとつで、古墳群の中心にある積石塚です。

昭和42年、若穂団地造成の際に行われた発掘調査の結果、長原古墳群は古墳造営が終息していく７～８世紀にかけて築造された古墳群で、横穴式石室を用いて同一家族を追葬した古墳と見られています。

７号古墳は、高さ３m、長径12m、短径10mで、内部から３体以上の人骨と、金環、ガラス丸玉、鉄やじり、細頸壺、長頸瓶などの副葬品が出土しています。

伊勢社（御旅館）

平安時代、ここは伊勢神宮の荘園（富部御厨）で、その頃に伊勢社が勧請されたと言われています。

その後、戦国時代の川中島の合戦で焼失しましたが、元和三年（1617）に伊勢の久志本神主が伊勢神宮造営の余材を貰い再建したため、それ以来伊勢分社と呼ばれるようになりました。その格式はその後も続き、久志本神主や代理人が毎年ここに来て泊まり、氏子へ神札を配布したことが「御旅館（おたや）」の語源となりました。

毎年1月6日の新春例祭「おたや祭」は、前夜半から近郷在来の人々の参拝や門前市で大いに賑わうなど、川中島平の人々からは「戸部のおたや」として親しまれています。

今井兼平の墓

今井四郎兼平は木曽義仲四天王の一人で、義仲の平家追討の挙兵に従い、信濃国篠ノ井横田河原の戦いでは、手兵七百騎を率いて川中島の地に布陣し、義仲の本隊とともに三千騎をもって平氏の三万騎の大軍を挟撃し大勝を収めました。その後、京にのぼるも、源義経らに追われ、近江の粟津にて義仲ともども戦死しました。

この五輪塔は、兼平家臣の岩害刑部が主君の菩提を弔うために建てたとされています。昔から五輪塔の苔を煎じて飲むと風邪が治ると伝えられ、参拝者が塔石を削ったために擦り減っています。

周辺には、横田河原の戦勝に因み兼平の命により岩害刑部が建立したという切勝寺などがあります。

お観音さんの春祭り

真島町真島梵天東地区は、いまはリンゴなど果樹栽培が盛んですが、明治時代は米・麦作や養蚕が中心で、住民の生活も時として苦しい場面を迎えることがありました。そんなとき、この地区に身を寄せていた老和尚が次のような歌を詠み、村人を励ましました。

「いにしえの弥陀魚蚕に身をかへて救う慈悲をば頼め皆人」

そこで、この地に鎮座する観世音さまに繭玉をお供えし庵主さまにお経をあげていただくとともに、この歌を刷りこんだ紙やおそなえした繭玉の形のおだんごをお参りに来た人々に配り繁栄を祈ることとしました。すると、住民の生活は次第に豊かになっていったということです。以来、この地区では先人の努力に感謝し、絶やすことなく大事にこの祭りを守り続けています。

聖観音菩薩立像（しょうかんのんぼさつ）

七二会瀬脇地区は古くから観音信仰の盛んな所で、土地の伝えによると、以前の観音像が明治期に焼失したため、本像を大阪府の寺から迎え、大正3年に現在地に遷座したと言われています。

檜材の寄木造で、像高162㎝とほぼ等身大の大きさがあり、切れ長の眼差しや微笑をたたえた口元など、やさしい顔立ちを持っています。肩から腕にかけては自然で美しい曲線で、また、長めの腰下につけた裳の、折り返しの衣文のたたみ方は手際よく左右均整に整えるなど、優れた技法が見られる平安時代末期の美作です。

国指定重要文化財（大正3年指定）

薬師如来坐像 弘法大師坐像

薬師如来坐像

弘法大師坐像

＜薬師如来坐像＞　病気を治すとされる仏様で、地域ではお如来さんと呼ばれ親しまれていています。

　かつては近隣の村からもお参りに来たといわれ、脇に奉納されている鏡には、「眠（眼）全快、更科郡中津村（注；現在の川中島町今井・原）島田善次郎」と記され、古くから広く信仰を集めていたことが伺われます。

＜弘法大師坐像＞　薬師如来坐像と並んで置かれ、同じく病気平癒の祈りのため、近隣の郷から広くお参りがあったと言われています。「像を持って重く感じれば病が重く、軽く感じれば病が軽い」との伝えもあり、体が弱っている時は重く感じられたことからの伝承と思われます。

七二会郷土歴史資料館

明治～昭和前期の農村の生活様式に重点を置き、地区内に眠っていた生活用具、農耕具、民俗資料など400点余りを展示した手作りの歴史資料館です。

家の建て替えなどで古いものが散逸する恐れがあったことから、貴重な品々を後世に伝えていこうという機運が高まり、平成２年から地区を挙げて1,800点余りの資料を調査。その後、農協の倉庫を借り受けて住民自ら企画、陳列・展示を行い、平成11年11月に開館しました。

館内は、土間や居室、厩(うまや)など農家の造りの再現や、むしろ織り器具、かつて盛んだった養蚕具、わらで編んだ結納品や衣装など、先人の知恵と技術を伝える、素朴でどこか懐かしい品々がいっぱいです。

涌池・涌井神社

貞観５年(863)の大地震で清水が湧き出し300坪程の池ができたのが涌池の発祥と言われています。水田の灌漑に供していましたが、弘化４年(1847)の大地震で陥没し、現在の面積3,338㎡、長軸235m、最大深度10.8mの池となりました。その後、水不足から昭和24年に桜井地区前沢川に水源を求め冬期間取水しています。春と秋には水の色が変わると言われており、涌池区民の命を繋いできました。

涌井神社は、天禄２年(971)領主布施小四郎重則が大改造したとの記録が残っており、木彫の大龍大神は、貞観５年の大地震で神社の西500mにできた涌池の清水から出たと伝えられる由緒ある神社です。

観音寺・木造十一面観音菩薩立像

造像の年代は、藤原時代前期から中期頃のもので、県内最古の木造彫刻である西条清水寺の諸像に次ぐ古像です。一木造りで、像高１５４ｃｍ、肉身は金泥塗り、条帛（じょうはく）と裳は朱で色彩しています。頂上にはもとの髻（もとどり）（髪を頭上でたばねたところ）を削って化仏（けぶつ）を植え付け、彫眼だった目も玉眼に替えるなど手直しし、天衣の一部を補っていますが、ほかは当初のままです。条帛と裳の正面中央に渦文をあらわし、衣文（えもん）には翻波（ほんぱ）がはっきり見られます。全体にあまり抑揚がなく、上から下までほとんど同じ太さであるのは、一木造りの立像という材料の制約によるものですが肉どり衣文は穏やかであります。地方作の色が濃く、国の重要文化財に指定されています。

長勝寺木造金剛力士像

仁王（金剛力士）は、「金剛杵を持つもの」という意味で、仏法や伽藍の守護神として寺門に祀られることが多く、長勝寺の金剛力士像も、寺の入り口の仁王門に阿形（あぎょう）と吽形（うんぎょう）が対になり、安置されています。造像の年代は、鎌倉時代後期のもので県内最古であり、像高は、阿形が194.5㎝、吽形が197.2㎝で、力士像としては比較的小型です。そのため、寄せ木造りではなく、檜材の一木造りとしています。また、玉眼を用いず、彫眼で怒りをたたえた目を刻み出しているので力強さがあります。両像とも単髻（たんけい）で、阿形は口を開き、吽形は口を閉じています。体の動きが少なく、重厚な趣があり、裳のひだなど複雑でないのがかえって剛健で、充実した体貌をあらわしています。県宝に指定されています。